

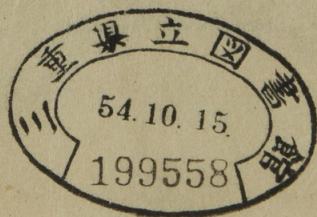
武家女可々子
三

武 藤

L367

ツ

3



武家女鑑卷之三

那須資友母

尊氏將軍の幕下小備中の那須五郎資友といふは那須蓮寺宗隆が
 末のりまりの氏の庶子左衛門佐直の父小叛を東寺小ありけ
 ぶと号氏軍をいいて伏しわらむ小原とすは味方すけ多り
 刃えりる那須を弟とせん陣小すわらとすはめさすは三條して
 討死しけりる免む弟は軍小出りて老母の行ふとおろと
 一はそひの戦小討死すといはるは河と小流りて秋の末をさ
 美の陰より刃をわせんとおひわらむ悲しくあせはとちり
 はるみきれは母とめごと取りていといふ下り武士の家小

武家女鑑

うすまゝとのの義をすゝりてたゞのりてし名をせしめて余汝をす
 ば何とのく妻子のまゝりたまひ父母のわりと悲やう人さ
 ど家の名をさひ世のあざけりと耻ふ小をそとくふべき命とを
 塵芥のどく小を捨れれ身疥髪膚と父母小交て見せで傷むい毀
 らざりし久汝が孝すて小あゝとせね今又父とててたをおさひて
 名を後の世で小揚人の名とて小孝の終るまでことばけさびい
 ると勇を励まして先祖のおりてまも起るまゝと元祖其市及の八
 島の軍小初の的として名を揚らして一射のほろりとして落紅の
 月後さねと跡の集小てう送りまふとぞ小戰場小隘とく梅
 勇めつふ船渡を帯が母のそと小義とくげまされていづくことある

下子將軍の陳より使とまると敵の降さばはよく見えては陸の戦ひ
 るんふおとまきく向てお掛ひのへととありまればいにかまゝのり
 とかともり只今味方のともぐらまじりまゝくまくりしてまゝして
 どうしてまいてく携ふのりいさひひして家子中へまぢち馬と馳こ
 てと云釈もなく突ていり追つ振りひ火華とらじ右往左往ふ
 切るひけ足東三人一族命等三千六騎いけともあらは儀記
 一足も引に討死まりの後に楚の項王の烏江決戦決つてはじも
 是中を度とじと教味方の目とおと後々終りて後車をお勢とお後
 へまれば陣と引て堺の浦へ落ちり老母を引ると孝経 傳
 へは母を父母の物われいと重く大切おまのりてけかあやまるとと

女監
 卷三

せざるやうに命をとりて孝子の常の情ありて死にまじりて
あつて命をすくひりて死にまじりて死にまじりて死にまじりて
我坊小いて勇ましく命をすくひりて死にまじりて死にまじりて
ありはこわりを引あつてすくひりて死にまじりて死にまじりて
に義のあふ死とう然んせよすすわけあつて死にまじりて死にまじりて
ありまじりてすくひりて死にまじりて死にまじりて死にまじりて
さわごうぶなれ

山名氏清妻

山名陸奥守氏清の妻とすくひりて死にまじりて死にまじりて
心づく温順ふして人小あつて死にまじりて死にまじりて死にまじりて

とまり氏清々あまゝまぢ兵部へいぶ右衛門みぎもん佐一の太公たこうふて外とち小こかかととううす

ふ令ひさ一いち族ぢやくすすぐぐ十二じふに箇かん國こくとと作しやくまるまるゆゆ急きふ六む十六じふ箇かんのの六む分ぶん小こあ

とふとふととてて世よふふ六む分ぶん一いち郡ぐんととモもヤやけけふふああ小こ婚こんのの播は磨ま守しゆ満まん幸きやうとと生せい

雲ものの守まも護ご職しやくありありけけふふがが将しやう軍ぐん義ぎ満まんととううととじじりりありありてて氏し清せいととかかとと

ひひてて南なん河がのの御おん味み方ほう小こ属ぞく一いち明めい徳とく二に年ねん大だい晦まい日にち一いち族ぞくああととりりてて都みやこへへ一いち

よよせせああままととももふふわわととててととぞぞれれいいりりああかかととよよてて太たいふふととううひひけけ

小こねね軍ぐん言ごんののふふせせととつつととしてしていいけけののふふとといいととややががとと氏うぢ清せい以い下げ八はち百ひやく

餘よ人じんののととももははららととしてしてはは後ごびび小こままりりああらら小こ子こ息いき宮みや田た左さ馬ま助すけ時とき清せい

民たみ部ぶ少せう輔ほ満まん氏しとと丹たん波は路ろささととおおちちととらら細このの株かぶ小こととててあありりととせせ

ししららとととと人ひとををひひりりとといいととざざりりけけははととせせれれりりととああらら山やまののおおくくふふららげげ

いら二人もかゝおれして傍そばより尻しつぽが崎さかよりわきまひお孫おひ孫小
 のりて熊野くまののついでさまよひけあり氏清うじきよの内室ないむろと母ははの妹いもうと小
 ありまゝが夫まゝの運命うんめいいづれあふとむし祿ろくのあく悔くわいもむあくむと
 居いるあふ正月げつ元日げんじつをすくふころはひ氏清うじきよの従者じゆうしや一人ひとりとて
 きてさてと京都けいとふおいくとこのふ晦日くわいじつの朝あさよりとてひにけしより
 すぐあはれど軍いんやぶとてくあへうや大おうこれさせむひ中ちゆう令れい弟てい上じやう
 娘むすめ女むすめ及およ指さし子こ小次せつじ希き及およあてて中ちゆう一いつ族しやくの言ことと残のこりまゝ討死うちじし結むす
 ひぬとやけるあまりのるふ小まことじこうばけとのと軍場いんじやうをみけ
 下くだりくるなまんとて誰たれとさやがて小おどらうざりあるはとなくま
 二人ふたりもぞとせとてりて大お討死うちじのよしやまきれはさてとと人ひとと

ちとちをさあへず但一若殿御兄才の別名とあせ流るる三百はりの
御勢かふく丹波路へ落させりやとりの内室きくとあへんさ
て、左馬助兄才の親のうらみを見まをためくと落らせ
たるうさてもしとめしと不覚さよ人のわろこの悲一きふ二人
の子さへうま名をまがしける口せとて浅まきさうか今なふ
あきと露の命を何おうけてうながしへきとてすそふ自害と見
きるとさうくへ女房とも押さめてかきたやうな死世の中ふ
いり、あまたたごひさうへらふかどして御跡とあうせ終せんお
とさうへん心さうふいへめとさうくまのひあくさあはるる
敵の牙を近はうねるおとくさまのせのへとて強て興また



山名氏清の
 妻子息時
 清満氏の
 不覺茂怒

女監
 卷三
 五
 ぬい圖



すけのせて土丸つちまるのくくといそざけふあまこの女房にようばうとちりく
 小なりて難波なみしの三位さんみといふはが糸と糸小女房三人はうり附
 そひまろ日招ひねの母といふまろよそまろく体たてひみまろふ小興
 の内うちあろう小動こどうくやう小こままれ久くて怪あやももろろろてたする
 さあけてえけふ小袖こそでの袂たもと小刀こばの物ものとをそての肌ひだ小突こつそくたれく
 りこんこはことあそく松まつの一いちじじあふあ興きようとかささせせかかいい
 父ちち女抱おんなかかけしけいいはは息いきとつええりりまりまり土丸つちまるの城しろとせ小こままれれ
 紀伊きいの松まつ来き入い内うちのの下したとそ正月しょうげつ胃い小こぞぞびびてて松まつ来き寺てら意い小こ布ふ
 りりああててささめめくく女抱おんなかかそれそれはは物ものああととふふといいととけけいていてききとと時ときととわわらら
 父ちちあありりううららふふ小こなるなる御ご足あ身みといいととしてして波なみははささああんんととははよようう小こ志しの

びてくげ祢承り難波の局とび出へび系部けいしの我われひはるぞと
 敵てきの軍いぎおし帰かへるは故敵こののの山おんははまはるざらりのははしくてとせ
 小すむぎ心こころ比くらむりへははるはる名なとくみか心こころ変かへて敵てきとあり
 卒そつふ我われもさやうふせめて故敵こののの菩ぼ提だいとさやうとり系部けいしとせ小
 姿すがたとつてはまらふ小母こははう中ちゆう自害じがいのはははてやふやもさく類るいしく何
 とぞ世よの口くちやまといふるまわせとく志こころのびて系部けいしとつひるを命いのちを
 なごて面おもて目めとらるる新にいとく小母こははとて世よ目めふりてとつひとわりけれ
 難波なんばのはが祢承ねじやうりて交まじ回わい房ぼうより小母こははとせくげ祢承ねじやうとせむひては故敵このの
 のゆりませひふらびひははけ方かたと恙はげりてにやまふふと類るいの申まを
 此こゝは収おさびひてはまらくく小母こははとせ後ごひて中ちゆう心こころと慰なぐさめとせとはのめ

うへに生まれぬ内室を面ごころをむけてよくうてと見んは矢れ家小

うねれる牙の年もすて小二十はゆり谷とにやぐく軍小出立て秋の

討あとも今すてく迹のさ身の並あまきやう小ん若くは法師より

世のさめと飛うくく小おびて母見へんをたの事ぞやままこりて

ふぶなと母小てとゆふはよもてうたふさる招性くは権子の小次布

ぶちとあくと美程と遠い浪を同く討死て教味方小共ら且は

やま小勇らとま小ゆは程小孝らとさる子小あはげふふいふひ

るさ未練の人と子といふてあひんるのいあかる小中ト今を中とを

てあふよりうさあかいとせをこそひさういさてうちさされまといん

いれをかおよばけて候るうら小すうて小まりま後ゆく苦ねらぬ小て

いれをかおよばけて候るうら小すうて小まりま後ゆく苦ねらぬ小て

今とせりりと刀をえけふはほどごとく身小そておれるくやうの物とや
しひろげておをきんとありあるぞて現ナリりよせ争ふせそめて懐いのせせけとば
主そのこし増小何やとん五そとらうとてんかかたは胸い小引あてくやうてらうなく
ちうとてありこれと去ナリれる志くはの正七日小民清八歳よりみさど一
久ふとそてたれふ一首の歌ありけふ

そりたげのさきねとかりあはさちひさてうたぬる志どのあ
増小内室いのうきうら

あびびととこれれづく瓶びん中そ素すり若わき海の菱あしの浮う橋はし

六む禮れいと刀やをえけふ人ひといとを悲かな中なぶらうらうりきり雑ま波なのはは糸いと練ねこ
人の女に房ぼうとそり小こ吉きち世せ川がわ小こ身みをひけて死し小こ身みとらんかか乃の身み其その

後のよりある人志はくまの彼小いさく子少てさぶらうの
接こねけとありとつふといあき廣しと事のかざりありまきり

大内義隆妻

大内おうち兵部大輔義隆よしかたの北きたの方かたを萬果小路内大臣秀房公の息女むすめ小て名
と貞子さだことまありとつと家いへよりあまひまねどもつゆあはれと
なむぬるいけんぢいけんぢとく人といとありとけんぢ女小なりよしかたあり義隆
別べつ彼か小妻せうとまおきておよふあふれいとあ身みとままり一い也や都みやこ小上りて
ありいほどとほはこ小忘れわすれざとこ下りくだとぞとま貞子さだこの方かたも夫うの大
切せき小こおりおふ心こころとまおしておほく見み小こ阿あられれををくくふふありありく小こ神かみやうやう乃
多おほくおほひひああががしし何なにくくをを送おくりりああととははくくちちととままててここ心こころをを慰なぐさめめくくととけり

とどめ物ちりりやふとて殿の久く乃在奈持まふと傳久くふん
るいり方もおろとつて一首の歌と云そくくままづか

オとほほて人のいこそぞあまもまろゑくまりゑくあふん

女房は又とふんていとうく恩義小感でもきれたの襟よりほれしく真

子の許小まかりてまわふ不敬ひけふまはりまり身もいやく怪ふ

くくいこりて秀へそさく心とくましく姉さるその妹といはくし

わふふとくするきれ女房のりがさこのいりあるとたむぐと疾と

ううあかまぞおほく怪れさうふりオ小ゆりてしべさやうもいれ

けうと殿の口ゆありてこび心をくけふととかくまがざれた人のまわ

小宮の真如やはさうん飾とお飾して尼小なるとふんとてこひ定やる

ありさぬしをたええまる貞子ぞと後さうひてたうくさふるのうであら
 わが才の咎とがことを重うふへおれかぐまでを許そととあてれじふいらるるこい
 とそののりよさひまふぞや養い之いく殿とあふはくふまはりておふひ多
 て手洗ふお世よとばうえが女え意い中ちゆうあるれと孫まごふはくふいらるる
 しく孫まごふいとぞまれ集あまの女房にやうぼうと世よをむごり小侍せうざい（まる）とらん
 せを世よふいとふべし事こととおほる中ちゆうふいらるる女のく孫まごくくおえ
 人ひとどもるばうりいけくさうく候うとさわさずまごがまめ小門せもんとこ
 がしくてはとこまは家のやふと小こぶぶとおほまれまごの中ちゆう小侍せうざいくぬまごが
 て七ななの棄すてらるる中ちゆうの事ことのまりぬくまごくわはくまごわげじまご女にら
 心こころおほくまごの孫まごぢらるるある故ゆゑこかく小こお孫まごとまごくわはくまご

りんふまゝなりてよもどぐとおのひに合はせふゆはれは是をふくも言
 ぢわろく慾なきものぢき世の婦人のこゝまでゆをふふ今ありと
 登りぬひがたどのなりあひひたまへ侍婢小をわやううまゐん
 さぐる者あまの夫をばはは後さのみあへ介ころうぶひては後く
 そ女小教ぢりあへりてあひ事ふまを物ぶもそての後くはさり
 こてはぶきさかぬえさせふ答とちをふさけぶくいららうこちあ持
 るましとふりりていお小あまむりてそのまほしくかろ原氏の面
 表れ物後小預申おの折れこひさりこりま後ぢもおねくす後小
 めえわやのね 瞑恚の焰とおしてりえあぢかこひ小胸とこぐふとまおとふと
 どひてあとしん(死)らんとはかふおまぶ我の氣をとさるうらねを
 けしき

うすさゆぐく今やぞで菩薩がらのどくあてやふんを顔はなとほはるふ

角つるとあらはへいさけ母ははをさうがさうきまをあげてまふとさうりごと

こめとのあのおのどが腹はらのこひみちをせて竹たけのさうり子こを打擲うちな

しあふおとかなげうち引ささうでえをいねばうとさわごお梅うめの

ふりゆふ杜昌とくさうといふとの妻つまをすぶとて嫉妬あつしのほくりまればはひふ

まうねさ念ねんのこころしてや腸はらの中なか小蛇こへびと生なして喉のどよりとひ出でるをまめ

しあり又胡亮こりやうといふとの妻つまをふももうらりのまくりまれば懐妊はらにえ

しそ蛇へびと産うむせりゆみやふれを強つよしとさうりさびやかり夏あつの地ちの

ばう熱毒ねつどく小こへりてくま井いの舌したとけな肥あとをさぶぐはまらぬ

とる今いま小女こむすめの祓はらへさうりふかきふと持もとふと劣おふぐく見みふれら

多くひ臆腑小蛇を生せばと心と真の毒蛇とを区まことこふるなりとけり
 らうりして恥ちおをまきまんとや我れ我夫の介心あるもこのみうとまき
 べゆらばまきとわらふね故と身とせめていよくすあやふ極まじひはう
 まけり我のおりひふを情とて何さりまきうらちのぞめてな
 くおとまきうあまうぶ人のあゆ志本なる極はひふと又わと
 れとてさひうおのぼくら情志まじふとのぞし中村氏いぢの娘がむすめり
 とあやふけしうを喻たとおまきうりじう和泉式部いづみしきぶ橘道真たちばなみちまこと小こ
 けまきふと志は遠とほきまひて

うはけりいぞ志こころこの志とるふせりめとすふ葛くずのうら風
 とよみておきり新古今集まへにこころあふんむらりぞこたあなりまほとて式

神皇正統記（よみかみ）小まふてくみくじ川（やま）のよびけふとて

おちり（さか）のほろふとわがふよりあくぐもほろ魂（こゝろ）とぞ月（つき）を

とよ侍りまれいびくとそとく人のあつて

行くよたざりて落ふ（おち）つせの玉ちふぶよりおかきひそ

神（かみ）の諭（こと）ありまふありまふとふ（み）耳（みみ）小かくさるえまるとえ

これ（こゝろ）の後拾遺集（ごうしゆいしふ）小つえたりおち（おち）は小や源（みなもと）の雅道（みやち）れじもあ定（さだ）

頼朝（よりとも）臣（おみ）小契（せき）とよびまる小定頼（さだより）やふわりてあえぐふわりしふ

あふてとをとりて定頼（さだより）とてふめくとひさくとめてとて

とよまれぬあふ

ころりやふ小あふ（あふ）同（な）ふ身（み）のしきとたかちりやふとふ

わがふもろもさき^な同^いふよと^り身^のうら^ま射^ちお^はら^うて^いの^ち成^せさ^しと^め
 人と^{なる}ふも^づ南^らび^して^ねた^まの^ぢ枝^りつ^のむ^のま^ふ引^とぢ^ぢ
 ぞとせ^んち^のり^るま^のよ^うち^りが^らづ^んぢ^ぢと^あら^うて^人
 枝^のい^ふと^うけ^らざ^りま^ると^るん^とと^後^こ拾^と遺^ふん^を
 南^く大^や和^まの^まら^りま^るん^のじ^とあ^ふあ^ふす^ゝん^とり^まる^けい^さら^ま
 取^とり^くなり^て家^もり^ねく^ぢり^ぢや^くほ^どよ^かの^よと^こら^内^かの^は
 子^人と^あら^うて^かひ^けん^やふ^けい^らり^ゆふ^けり^いぢ^ぢ
 け^い女^はに^まら^るゑ^まと^んぢ^まと^のら^内^けい^ぢと^よぢ^ぢ
 こそ^けい^ぢや^つけ^いま^らす^いぢ^ぢて^怪^あぢ^ぢり^らら^ら
^こ小^あふ^心も^やあ^らふ^とう^とぢ^ひて^月の^面白^りけ^ふぢ^ぢい^ぢぢ^ぢ

何用へくま存よてむ持ふ前裁せんさいの中ふかむおまをくつなまれの教を
ふやそ琴こしをむさるしは清いとうち歎なげれぬふらぬまで

風ふけおきりきる信のぶのけいこゆふもふやさしあつむとらこしゆふん

と早はやさきそてい淋しみまりよとこし是こゝよさうてあそむふこへびせと

よりけひおてゆふぶなよりふけふとちんあのをかく風かぜさぶ

しと教しよすうらあむいしうきりあゆふえうむほとくととどり

けりやんを夫おとこのうなを流ながるくかひひかりるるりき用もちといん

とて仲なつはる信のぶとつぎ信のぶのけいこゆふもふやあつむとらこしゆふん

ねとびとの事をきつ信のぶとてあつむとら信のぶとらあぶがうとけん顯けん照しょう法ぽう

師しがはせしと定てい家か卿けいも感かんぜるとととぞきうけん禮らいととけん教けんの山やま路ぢと

且つる間とがわれゆきの花れをとおひひあてまゝ居のま甲やといふ
 とのさどいひておねまびとの位きまの日本紀おんよりねそ
 びのぬいひおまきまもより是をすて下まゝなりといふ
 ゆい女とこのあごふあるをゆまはもかびひまを七かくきり大
 切おまきのすまこ様より教すふよしくはゆまあくるのなれとなくふつま不魚の患
 とあふんくあやううはま情ふまゝのかさうりやいふかくせう流為情の
 男くるとそいひあわれとんすぐくゆんひびおやお入をゆまは
 ならまきれこまんま古今集おまゝ今をいふとあり六帖おまがやまのくまろ
 ことあるありまゝおま伊勢物語おまゝくあやうまきれかりひ業平と
まゝありつ称ひま紀有常々娘のるるると後ふを流りていひついで流えきりようおれら

ことあると女ががらふ心ざしあそあはぬはしきれんことこのあ
ご心をおんぐの一旦の浮氣はしやしくも多し小妻つはと行つ夫
あつとぬいふ候うふるんれんがくくを休いするの事ありそ
とさすか小んすそやたおふて妻の心でふまされはかろひばい
ふとて改あむるたあふべし

はしきとてうんことかほえばおれと意となひさふ

はしとて我々人なわはしすからりとも中のこえやりの言

いしの世中乃きまのぬふまればそのころ改まる金ぞむ

とてまきんけ心あり世のきうひけらうとまてそぞ我々とあ

とてかゝわらげし夫とふせざしてすこゝののちをけしむ

いさひでみ神ごとくおま女はくくあさりていぢくとせぢな
やますさまざうねるゝのなにしはるふぞ其の振おちのふくさげ
るは休いて夫の心ゆく興いあせさうくさあざくすさ
わらふたとく扇あふとりて空をあぶぐくくも燃ふい薪いをそふ似
らむらふ惑すふの甚いさるいびやまほらかりのそはうこめて
あさひへ

うちよそふ様違の岩をばさうておのどでくおいはれ
うらみいる難波のまほりたけかきややくあまのりるや
さて神ごの心をゆりたてふさうと夫のわらば嫌いひあるごま
といふさてもくくす弁いらむるさるげくより起おふいんいつづ

らぶとてひすては迷ひよりしてうりてまぬの持こひとてのまゝに畢竟
 わがよとてさるのまごさかりされが嫉妬あつとの死おん念ねんがこふ時といふ
 今のまわるといひ出て身とせとら毒どくをなるといひいりいふ
 とはくもたしむじまのありさうく女をおるやうふ愛敬あいけいふ
 く夫とおひをの誅つとひとせぢやとてははらふとよく徳とくまのぶ
 とふ花真うへの真節ていせつくちふまれ

はらふとてさうさげせまのよおひとておれそのほいさるまれ
 うづりり人のほいさげしなまゝいふまのまゝいふまゝいふま
 うまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝいふまゝ
 ばいばいばいばいばいばいばいばいばいばいばいばいばい

而して此款と心法しんぽうのまはりつらしてありまふふんちんがびりめさひ
とさうえむまはりて心法しんぽうびりめさひまふふんちんがびりめさひ
らるるありともかましくいひのまはりつらしてありまふふんちんがびりめさひ

よの月つきのれれ心法しんぽうびりめさひまふふんちんがびりめさひ
まふふんちんがびりめさひまふふんちんがびりめさひ

け款けうのまふふんちんがびりめさひまふふんちんがびりめさひ
て心法しんぽうびりめさひまふふんちんがびりめさひ

しんちんがびりめさひまふふんちんがびりめさひ
女房にようぼうと棟むねを感じて心法しんぽうびりめさひまふふんちんがびりめさひ

しんちんがびりめさひまふふんちんがびりめさひ
しんちんがびりめさひまふふんちんがびりめさひ

なるふかつい 権者けんしやとありおのおのとてとて寵ちゆうを専せんふせんともゆゆ治ちの妻つまとも
 ささををややかかくくれれををろろくくきき隆たかををつつぐぐいいのの志しりりああるるおおののがが種す
 姓せうののいいややとといいてて人ひと小こ梅うめとといいてて身みとといいててざざりり借じん上じやうふふかかめめてて家け
 小こととびびここふふかかどどおおふふくくじじぶぶののいいららりり義ぎ隆りゆうのの妾めかけののいいとときき
 さらさてていいげげくく隆りゆうののいいととききををわわやや

今川氏親妻

今川上總介氏親の室むろへ治部大輔義元の母ははなりなりと中子ちゆうことすすりり

けりけりあるあるとといいふふゆゆめめ喻ゆされされままかかららるるべべてて世よのの人ひとはは負ひん福ふくををもものの

婿むこ多おほるるゆゆめめああふふべべどどとといいひひままててののくくとといいふふああふふべべどどををいいひひ

正ただしくしくああのの天てん道どう次第しだいををははららくく年とし祿ろくくく天てん罰ばつありありおおのの國くに果はたとと

いふるやうく勢と勢との後の事なりとかくあさけく天命の程と志
もふと志とくのおやむびくる今とまねるるしすべ運と天ふ
やうにといするも人の勢びさたをそしてま上の見候ふいれあ
るれあふいりてま生れたつるの業をもふ善人おして禍とま
ぬもざるそとげく運のはさるるとあさうめて泰然じて心を
安んずやりのべとてまうとて今とまふまふあだじれもとゆ
忍んたんとせふか上るるとも天命の是ん候とささやうぶらびい返
くまよひ七すゑるとのまは是後さかめて大切なり世ふくわろほと心
ざらふ人といふもを七善と法とむれとて人中まきせしれちかちか
はくして七功あふかばくりて禍おやく厄とすぬれざささけい



今川 氏親の室
 より人を
 諭して
 天命の程を
 こそく圖



監
 卷三

おせんうさるふおのいすはれおせとて心ほしとくおし甚し
 此ををまこつふとのようつてらごてせしそむさるふおのるわい
 るを運命うんめいのまはれおとてようつて心まるとて節せうとすん
 とあつたばかりはすうたを自ころるぞかやういふまよとわわさ
 て女の中どひやまをを神かみいり佛ぶつこのみれわさるるべしはばらふ
 家の勢いきぢおとて身のおろしと怯おそまはててお小神佛ちんぶつの力ちからたの
 こふるを七すしとへかこの社やしろ祈いのねとまめわの寺てらを護摩ごまをた
 うせみまは伏ふ小祓こはらとけりわ祈いの祓はらのれとけりつと祓はらとてあぐ
 はまてらこのおざりとけりて心まるとて災わざはひとのまも福ふくとけり
 おりふらおれら小祓こはらと心まるとてあぐとてあみとばしひねらふ

養生ようじやうとほりまひ糸とたてりてきまふ神かみの加護かごとあせんとせむい

ぐく冥やみ加かふらるるるのあきまうりて神かみもくふさくこそおぢりゆ

りふぢのあえさいやう藤井ふぢのあえさいやう懶齋らんさい翁ういぢのいふとまぢばやとも我家こゝろいへふ禍わざはひうて福ふくあ

ふのと祿ろくぐとざるわらう祿ろくぐで善ぜんとらさば悪あくとねとどざるわ

そとば甫ふひんとたり少ひかくの轅ひかくとふじふふうふじしらすて悪あくひの

どくるとじまふふと悪あくひのどくねじとくまうりふ月つき夜よが

と自みづかと由よしち神かみ佛ぶつふらるる人ひと智ち一いつも身みふ善ぜんとど如ごとく月つき日ひ神かみ佛ぶつ

小こ福ふくとれとじふふといねの種こゝろとやういふて福ふくといふのまげと今いまのをを形かたちが

どくといふ月つき日ひ神かみ佛ぶつのあらねをうさくといふね種こゝろのまの多おほ

コこがささといふ孔こう夫子ふ子のこ四し月つき中ちゆうと飛とと夫つとふがいふといふ禱いのふふといふと

のさまひわが小姓せうじの神は如教にがうを七むと小孫こまごのたふおひひるべいのと
 ばとても神かみやまのりんと示しめすふまうをあれと人ひとなく利欲りよくの私こころ
 けがもてすめぬと善よやううとくたをふと悪わる中ちゆうをまじしむ悲あは
 しとわがさるばばやとり鳴呼なわをんをめてもとまのたをほめあげて
 ぞと神かみ併ともと特とくおとるを悪味あくみのいりふ堪かんざるふまいてやまら
 とのうて是こゝろやどののち程ほどととわさまにばおほるうかた禱いたのねと
 と同じおなや七室しちむろかととんごさくははははと祿ろく武運ぶうんの長久ちやうきうとふひ孫まごが
 やとあふをゆひとふ片腹かたはらいとさわごさうり室むろ氏の駿臺しゆんたい雜話ざわすけ
 るのと海うみどおとてこりすべて人の運命うんめいとんかのおよむるわめて天あま
 ちうはよりおさるや世よ話わやと運うんとてよわりのといふこといふ運うんとて夫おとこよ

かういふ中より天の命を以てしやうやと心ざして者も情なく人
とあられりそありて人をたふさふ心とさうとさすべし人未
とさうして考ばかりと及さぬ情ありきとさうさばかくはと
めてねとさうば情と持ててるがば情より天の命を以てはくさるふ
り然の眞助もあり人あをことと武運長久のまがりとさういふ
まれきまなげりことと世俗のままぬさうありあおの事と利て
人と害し巧まる智とたの事と詐と怒りこれと世俗とさうい
計とありやあどはひひ天よん捨るふべしとてとふふすて
らとさういふとさういふのたうさうわとさういふ時より世俗めく人
の存浦とさういふとさういふはくさういふとさういふとさういふ

諸寺諸山より持すわねる武運長久の牌と「不」字を存しり

り「志」を小其家改易せしとありひと子孫断絶して武運長久

の牌を拜の南門にありるまうせ家内らびてて泣きもみく

なりやくとありてありて我を存しと存しと存しと存しと存し

とて「晩節」と保ざるもいづくのぞと下のみる天の御持ひま

て武運のまよりるまねふこそと作しと見ゆ天の御持ひま

ふけはしとて「祈禱」厭勝の力にて武運と守ると存しと存しと

と存しと存しと存しと存しと存しと存しと存しと存しと

羅尼やの物と信ぜるおろかなる婦女などのすまといふせん夫

と存しと存しと存しと存しと存しと存しと存しと存しと

惑たふさざるをすくすいたふさと歎なげくきよのありといひ下くだり世よのくは儀ぎありくま
いとふさぐううてさふかきとるは涙なみだそのあはせて示ましゆるよとみて
ぢぢぢぢふふふふ――

尼子晴久妾

あまこちもつげのうとるひさやとこ ちぢぢぢぢぢぢのすけ
尼子下野守晴久の従弟小宗道左馬助といふものあり晴久とて
むらありて刺さちぢへんとむごくま暮くますかされて居間ゐま近くきさひ入
けふ君きみの従したが弟いやくこ小つ宗ね道みち左さ馬ま助すけといふまねを宿直とのおのきさひひかると
がじふるのちくふふゆふ志しのびひて晴久はるひさの寝いねふとてかひなまり
すてふふおおのの涙なみだふぢびてまぢぢぢぢぢぢぢぢ戸かどを押し破やぶりて入いんとせすふ
其夜も晴久とて寐ねぢぢぢぢてありまねをせと寝ねと起おきて戸かどをぢぢ

何者なにものもどきとてなるにち宗道そうどうをすくむて大かかれた腕うで小指こさしをて指推おし
 へく小晴こはるをせぐるあらに彼かれをか押おあまして倒たふとん所ところと捕とらへとわ
 ざいと一い張はりはのりて退のきまれ果くして宗道そうどうをお押おして戸板との上うへへはぶ
 へこふ倒たふれり晴はるらとなりておままれの宗道そうどう上うへとなりてくへけりさ
 せいども晴はるらはひ小紐こづなをて結むぶをあたせしてなまきふ小側そば中ちゆうを
 女に中ちゆうばらりなりしをみか忘われてあくてるはなりし小晴はるらの妻目め
くらもれが一いつくもある小鼓つづみの志との緒いとと解てあらはるもとり晴は
 黒くろ某もがむじをめもむやく小鼓つづみの志との緒いとと解てあらはるもとり晴は
 久くあまりて引ひがめてま教おし頭あたまと切つまりは女にうちをはらしてはらして逆
 くかぐのどろく勇ふて敵たりまれの晴はるらはして結ぶはらしてさりなり
 とあん

松田左近將監つよ妻ハ尾子伊豫守経之あまこいよのつとむひきの女むすめで下野守暗久あもりのさくらひなの妹いもうとの
 永禄元年えいろう元年毛利元就雲州小歩りりつとつうんに松田ありまら白鹿の城しらしかのしろを攻せめむ
 小保おほほの守まもり堅こくして救月すけつきとぬふなを破やぶき元就出雲うづまの隊人らいくん小
 とひとさうりて松田まつだ一族いちぢく小保おほほ門かどのりりを招まねきて松田まつだとままを
 討うつせしむるをり松田まつだいいせんとひひていすと危こ角かくとさうさけてあり
 きるか小妻こつまとていいふふささいいんん下しも冊まつ守しゅ友ともを攻せめむふ時ときもも小
 和わ後ごささささううて幸あまちちささらら欺あま犯まひひるるりりるる若わかふふまりり強あつららばば今いま又
 終はれれるるも懲こららへへたたやや是ことと幸あまちちささららひひりりここひひ欺あまららるる
 ああらら後のちののち世よままののち恥はぢぢををぐぐららばばわわがが身みらら女めををままもも敵あ小こ降くだるる

るゆへに祿がとくいとも小塚中しんちゆうに死してさき入いるを冥路めいじゆをへんく
んえのんおんと義ぎを励たげまして安やすきねいけいいを感かんじてけ家かおまて
ぐひみち付つ死しの覚さ悟ごをささるるはるほど小元就せんとすけも軍いくさをすねれ
城しろをほひおせあちさきぬ松田まつだ夫婦ふうふいさよよく死しをさげて朽くせぬ
名なをせりこゝんたり

重富兼雄妻

重富おほとみ民部たみべ太輔たほ兼雄かねゆうを石州いしかう小せう名なとゆる武勇ぶゆうの家いへ中ちゆう福屋ふくや式部しきべ
太輔たほ隆たか兼かねが旗はた下したなり小隆せうたか兼かねが奈叶なはざる事ことありて一いつ親おやあはれ
果はたに下したとく居城きじやう押おしをせ攻せめやとをり兼雄かねゆうの妻つまを福原ふくはら下野げの
守まも兼教かねたかが姉あねありもまはれ我われを小使せうしと城内じやうじやう小使せうしとし高城たかじやうやうて

づくまはさしく志のびては交まらぬわむと目あゆの軍功小
 かて助け手おせんをり送りもる彼妻まふおらひて一珠のまは妻
 なるその夫まうこ子ごとの討死うちにまをり守つてつむるり生れんて何ぞ
 始はむまきりるるま子の何なづかひも年とし幼わかきものまはせめて
 是このまをけつるるり彼かをかみ救すくひたさせるまふもくちとまの
 びて珠たまを出だしはばしらとて返かへりまの兼かね教のり其その旨しとやのびて陰かげ
 兼かね小こ教のり死しとらりけま小こ女子むすめらんと苦くるりるまふとわしとと
 男子おとこ小こおいてる胎たい内ない中ちゆうでとまびして殺ころしたとらり兼かね教のりせん
 らててさし姉あねのあとへ人をひとをたとせめてとお身み一人ひとりおても命いのち師
 うりたうはして人ひとこの兼かね教のりとまふせすひれとわまけて珠たまと

出るへて入られたるさてもいながらひつらや申者のが所なるねいふ女

のそれ命をけしむとて夫まうとこ子ことを攻せめ殺ころさせてむとり陳ちんのぶ

と出ふるやわらんいけむと十じ女にょをむとたふらなをこら子こをれ下くだ世よ

守まもりふりへてやとこらんゆらねど隆りゅう兼けんを拜かり結むすばはぶるんさな

こら小せう妾せう執しつふたね若わ海かいの波なみふくむひてうとくこの菩が提ていらや

らんよりきむおどろふおひしてさなと名なをといてさうらひは

小せう妾せうとてま後ごといふいといてさなとせむせむさ一ひととぢ下くだ討うち死し

の利り義ぎねいけふらるるねど小せう隆りゅう兼けんとさうり小せう攻こうつけてはひふ焼や撃げ子こ

一ひとけむら一族いちぞく郎らう等どうとらくく村むらとて重おも富とみが家いへはるるびふまりけ時とき

兼けん雄ゆうの妻つまをむし早はや三さんかりしとぞ下くだふらぬの小せう袖そでをとらて白しろ綾あやの衣きぬ

と裾ついで高くわくしぬいそのまをちか中ちか小ちかてちか袴ちか一ちか白ちか抱ちかの大ちか薙ちか刀ちかびちかびちかさちかりちかと

大ちか將ちか城主ちか民ちか部ちか大ちか輔ちかがちか妻ちかありちか女ちかありちかとちか大ちか丈ちか夫ちかおちかちちかあちかりちかとちかさちかぞ

敵てきのてき及てきぐてきらてきあてきさてきりてきててきたてきやてきあてきすてきまてきとてきあてきまてきすてきててきおてきて

出いけいりい女いるいまいといらい付いそいういんいをいせいないりいまい生い捕いせいまいよいといてい大いせいい

そそりそあそわそんそとそ一そけそなそまそ許そふそまそとそはそしそあそらそまそすそせそあそまそれ

とと女とらとらと敷ときとまとはとるとちととと敵ととと追とまとりと死とねとおと弛とまとあといとはとは

ひひんひとひ目ひとひ井ひぞひ病ひうひらひひひかひ祿ひてひぞひ又ひえひらひけひるひ兼ひ雄ひとひ結

ささらさ猛さ將さるされさ血さ烟さとさそさ切さちさはさ月さとさおさあさりさまさをさ追さまさてさら

ままとまもまおまいま死ま人まむまびまとましまとま多ま勢ま小まままひまびまとまてまあままま

ああまあまあずあらあむありあ今あとあまあまあずあであなありあとあてあまあとあまあとあ後あ小あ獲あがあ死あらあけ

とも妻も彼末子成りてかのはの中飛今死せまるゆじ
くも又あはさるのあり女の身中かくまらげねるむざし世の偽
の烈くひうりけあゆみゆいといきまひいりてあはさるのあり
ふの錦織夫人きんさん綉旗女将きうぎぢうといども口にてやささるかふらうとべし

慶壽院殿

あはれしての幸あきえん このまへんがひきまこととくを せん幸せんえん
足利義輝將軍の母と近衛關白尚通公の息女あきおて 前將軍義晴
うせりてよりと尼名と慶壽院殿とやをりあき永禄八年五月三好
長慶ちやうけい叛逆とくわて嫡子ちやくし義經家人松永久秀等とてはく空ひら
町の御所と攻まふ不御ふご方の人とゆせぎ我どもと逆徒さか叔ふ
ゆざして乱れ入るる義輝御所よしか火とかけさせとけうとかき薙刀

そりてお出のし教をうけのびくふしてはひよくしこせ
ひね^{ごき}下^{ごき}の女房^{にようぼう}そりく小尼君^{おにぎみ}のま^ま成^{なり}りあ^あせぬちのう^うあ^あの
とす^とあ^あま^まれ^れあ^あり^りふる^るのい^いで^でさ^さた^たま^まと^とふ^ふり^りた^たく
ふ^ふる^るば^ばや^やり^りて^て一^{いち}家^けの^の人^{ひと}こ^こみ^みな^なは^はな^なび^びぬ^ぬふ^ふよ^よわ^わと^とひ^ひ
り^りれ^れは^はく^くと^とあ^あふ^ふべ^べと^とう^うを^をそ^そか^かの^の内^{うち}に^に飛^とり^りて^てじ^じる^ると^とま^ま
つ^つあ^あの^のひ^ひま^まり^りせ^せふ^ふま^まご^ごと^とて^てた^たく^くま^まな^なも^もあ^あや^やと^とく^くて^てと^とく^くせ
ら^らふ^ふべ^べと^とあ^あふ^ふま^まう^うこ^こし^しと^とあ^あの^のひ^ひて^てく^くと^とあ^あの^のは^はつ^つび
ぬ^ぬふ^ふ悲^{かな}さ^さふ^ふ後^{のち}の^の日^ひ成^{なり}く^くふ^ふび^びて^て死^しふ^ふあ^あや^やせ^せる^るひ^ひま^まり^りと^とあ^あの^のゆ^ゆと
や^やふ^ふゆ^ゆと^とあ^あの^のあ^あふ^ふあ^あれ

奈良義成妹

永禄のち務伏見小使すけまるまちちららたた邊へ義ぎ成なりととふふちち世よ小こくくああるる

武士ぶしのりのりけりけりああままふふ一い人にんの妹いもありありううちちままつつとと世よ小こすすごごままををめめるる

ひひびびしくしく歌うたのの乃のおおとと心こころををままててままととよくよく書かききつつりり女むすめありあり兄あに

の左ひだり近きん笛ふえととままののとと京けいのの西せいのの圃ぼ小こ真ま光みつ冬ふゆ左ひだり邊へ射やといいふふ上うまま乃の

ありありけけとと念ねんををくく通とほひひてて笛ふえををひひけけ子こがが年としをを終は終は小こけけとと心こころがが

いい小こ親おやくくううちちととけてけて内うち外そとををくく合あははりりぬぬ真ま光みつ冬ふゆくく伏ふ見み小こ

冬ふゆ左ひだり近きんのの妹いもをを心こころををめめししううちちりりううめめでで惑まどひひくくははわわ小こ左ひだり近きん小こ

ひひううひひてて替かへへこのこの妹いもををわわししふふたたせせるるままとと今いまのの書つききととままりりててけけ

人ひととと世よををかかごごりり小こすすべべーーといいひひままるる左ひだり邊へううちちてておおりりひひももううくくめめるる

とと承うけけけととののううねねりりととれれはは方かたととあありりののううわわがが妹いもととままああととままととままととまま

ちよとひはくろくもあり真光まっこうたるのほひほひくすまふるのあまは
 いふもしてけ女とる小入こいりをながまてまじくまじくはんぢかひ
 てなやめさげりもろさごとと左近さきんたるりをもりりてきりは
 とめて師弟しといの義ぎとな久ひさはる小野村のひのむら越中守えちゅうしゆといふ方かたよりまき
 り小媒こまとりて求もとじふよを左近さきんごとと母ははふくうりて越中守えちゅうしゆとい
 ひるばをせり夫おとこのあは前將軍せんせん義輝ぎきと三好松永みやうしょうえい小わらうは
 れのい舎弟しやてい義昭ぎしやう將軍せん織田信長おだののぶながたをけきてよと三條さんじやうの本國ほんくに寺てら小
 おりけふる永禄十二年正月三好みやうの竹黨たけとうやふひちりて信のぶと平へい
 寺てら攻せむせりね宮みやなるわげの勢せいありしごとほりく防ふせさ残のこひまる

ほど小法師の軍うちまけてちりくふもれて落むるまありけり
 左近の妻もれ中少ありけりあが寺のほろりせよと武者と組まじ
 てのいしと備城とのほどと引ちりくるかけ軍のほどはひいて
 へへへるもろまに東寺の方とてして返まるかの真光の光をき
 こえて左近と討ちおひひまれぬをきいて返かけぬとせ
 きてあゆむと左近のほどおひひまをて教かひしあまふひまふ
 かのひまの真光の光とてせくと呼ひまりたゆとてひひける
 教かひとてしわくせて我んとするあふ又十強はかり返来りて
 せよとて中より放ちまるとまてあやうく左近と討ちとてまり真
 光走りよりて首くんとくるを左近臥らうとてあり拂ひけり

刀こころ光ひかりが膝ひざのまゝまゝとつゞけつゞけとびかきとびかきはなれて引ひきのぞくぞく持もちのる
小他こたの武者むしゃささうてははひひ左ひだり邊へが首くびををままままりりけけののととんんととののか
貞光さだみつううちちわわぎぎ人倫ちん小こああははははみみるる爪つめくくままとと嘲あざわらりりいい
怖こゝろいいととわわおおひひままんん貞光さだみつうう門かど小これれととううねねああららどど虫むしああららけけり
ささららでで貞光さだみつとと飛とぶぶととここへへふふかかききふふううててははひひ小こたた邊へがが伏ふせせんん乃
家いへ小こわわここててかかのの妹いもうととと奪うばひひららりりててゆゆととりり女むすめををままららくく不ふ義ぎ小こ屈くつははじ
まま志こころざしああららうう小こ南なみささうう兄あにのの仇あだををれれんんととすすてて彼かれとと殺ころさんんををむむえ
ひひささととわわららふふささととどどとと争まぐぐととささうう小こ出でささにに貞光さだみつがが家いへ小こああちちつつここててい
ひひけけるるととわわららははははとと縁ゆかりととささららわわららるる世よ村むらとと左ひだり近ぢかとと一ひと本ほん小こううとと
ままととささうう今いまととああののむむねねののささややととなりなりぬぬままとと君きみややとと契ちぎひり

て世をくま人もいふもいふもあつたの世に縁つるべし
 不母のいふ不母はさうやあつたさけりあぢりさうと
 て給ひて祝とさうてあつたさうとあつたさうとあつた
 卷をさうとあつたさうとあつたさうとあつたさうと
 はかりけふ不母これを披き入れさうとあつたさうとあつた
 けて不母村とさうとあつたさうとあつたさうとあつた
 一かゝるさうとあつたさうとあつたさうとあつたさうと

おひひにあつたさうとあつたさうとあつたさうとあつた
 母とあつたさうとあつたさうとあつたさうとあつた

かゝるふすくやふいまんはの刀を拵て刀をぬきをまから自言
して死しまきり使つかのその行ゆひのとと七日をやりどおど病おとをたれてま
ゆまり真光まひかりを使つかとやいふおぼておひか女にをたてらるがうとて目

とかくをまげて何なにもいふことと下りそひまる女にをびうらま
眼こころさうと奪うばりり兄あにの教しおひまをやといひとあへばふらふせ

てこふさる小報こほりひねせまされすくおわが身みを店たをとりてま
おて扱あつかりて死しりまり女にの後のちとふら例れい中ちゆうとあるふ事

なりとぞやど真烈ていれつとびひすくさ女にとくいさばらふすける
るのあしとあくとと悲かなしむる人ひとなりおね後のちお信のぶ長上ながじやう落らく

ありておのりとて憤いらいりおひかふとるの真光まひかりをたれら末すえの

世中でのいづれも小せきとして妻つはと子こかへともくろつかけまのゆきやこ小
 は女のおなめままし今いまさまいひのぶらふ詞ことばのしらふとしくおはらはらと
 さとふあちの心こころとはらかつまのこころうはらふとまがこころあ
 りよはらいせまの人ひとのいずれもたいけじのままとまいらふおのお
 るふ中なかつ小こ男おとこ女めの情ばりふありやすまとのままり世の女いずれも親おやの
 もふあらふ間ととさとふあらうととてやらうとまま志いでおのがらを
けがけはらいふやらばおねがちやでれ面おもてぶせとらり井乃のままとまいらふい
 りてと老らうる父母ちちととらすてく慈こい海うみの雲小こまりやまとひ金かねじぶと
 志こころげまるをどふいりとせすじと樂めらふとあらいと流ながすくくおく
 いべ一いっ命いのちとすてくと母ふべいらうとかくいらばらうとあらふら

とさちうく畜類の心ありて

大乃義成妹の信長記總見記信長家譜等の書小入え候と

里中村氏の姫鑑小のせとてりら小よりとてあふれあんであ

愛いせはせむとてりら

清水正次母

ちしづかつけのまけのぶいさ

わしづかひはたまごぐり

ぶわり

清水上野介信冬といひあつら北條氏政の幕下して武勇のほまれ

あつらりし今なり其妻はつげ小かこくまると慈恵の心ありて家

このころのま

まもぐ

あまけ

の若黨末このまやぞとあはしく情とけしていとまり孫小す

いんま

まのま

いよとる大カみえびらの巴葵とておもおとるやいとくいひあり

あつらりたまごやんまご

或時中あ社(信)あふるの飯小いしく大なる牛小茶二俵つけと



奈良義成ちやらよしのりの妹

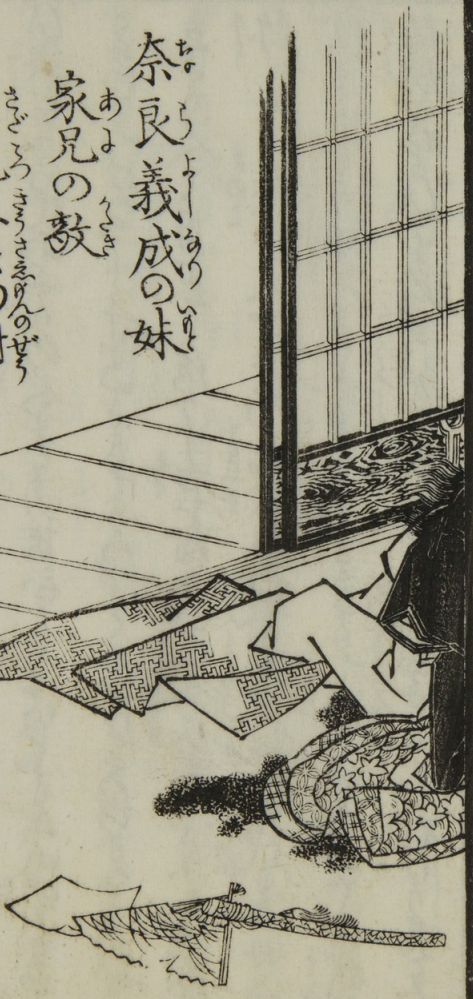
家兄あやの敵くさ

貞光さだみつ之左衛門さむらひ尉ゑを

付つて

自殺じざく

の圖



女監
三

ふが後^あは^あは^あし^あを^あひ^あち^あを^あら^あせ^ある^あ崖^か小^こふ^ふみ^みお^おら^らる^ら完^い角^と小^こ依^のの^ひ繩^ひく^くつ^つま^まて^てそ^そぐ^ぐま

小^こう^うま^まえ^え

う^うし^し 谷^や底^ち小^こ落^おち^ちて^て死^しに^に了^りす

ま^まり^りの^の繩^ひと^と切^きや^やど^どく^く人^にま^まれ^れか^かま^まち^ち牛^うと^と谷^や底^ち小^こ落^おち^ちて^て死^しに^に了^りす

ひ^ひと^とあ^あが^が

り^りと^と引^ひ揚^あげ^げや^やう^うと^とう^うま^まれ^れる^る牛^うぬ^ぬと^とあ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^らひ^ひ牛^うを^をか^かい

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

と^と小^こさ^さり^りて^て喘^あぐ^ぐお^おま^まり^り情^じの^の妻^づこ^こと^とう^う今^いて^てふ^ふび^びん^んの^のゆ^ゆい^いお^おも

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

ひ^ひ興^きと^とこ^こを^をあ^あら^らり^りの^の人^にと^とま^まり^りあ^あら^らる^らり^りほ^ほく^くと^と牛^うの^の側^{そば}小^こま^まり^り

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

り^りあ^あら^らる^らけ^けち^ちが^がう^う牛^うと^とい^いて^てう^うろ^ろど^どり^りに^にげ^げて^てた^たの^のり^りま^まり^りひ^ひさ

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

ま^まり^りく^くて^て目^めと^とお^おと^と落^おち^ちる^る舌^しを^をぬ^ぬら^らひ^ひて^て人^にか^かの^のま^まこ^こと^と小^こあ^あら^らる^らと

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

称^なり^り其^{その}子^こと^と太^た神^{かみ}な^なま^まの^の正^{ただ}次^{つぎ}とい^いふ^ふ駿^{しん}州^{しゅう}長^{ちやう}久^く保^ぼの^の城^{じやう}代^{だい}り^り母^{はは}乃^の

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

性^{せい}と^とう^うけ^けて^て力^{ちから}持^もつ^つり^りく^く武^ぶ勇^{ゆう}も^も父^{ちち}小^こま^まり^りて^て烈^{れつ}しく^くと^とひ^ひぐ^ぐの^の我^{われ}小^こ

あ^あき^きと^とあ^あは^あら^らる^ら

猛^{めう}威^いと^とぬ^ぬら^らひ^ひと^と名^な実^{じつ}八^{はち}洲^{しゅう}小^こま^まり^りと^と一^{いち}騎^き高^{たか}子^ことい^いを^をれ^れけ^けり^り其^{その}と^とろ

甲斐驪と名づけて七寸小竹を大するあり只き八寸にして

物ともせぬは教とてあつてもあつて人なるをさしてのる

あつて正次此馬と見くもせし乗て走らせけふあつたり小

強くと糸躍りし急踏して背腹を止めし血を吐て倒すとなり

あふと北條佐竹の戦あり小槓の本の六角小げりくる大

竹の持より佐竹の陣小進てるよふておてゆかりしふお

小ふ人十人のとき守けり又之に死と我ひり小教とてりて孫ぢぞ

小て捨たあつり孫ち首の志所在集と孫一萬樹天下三むす乃

一人たり志とてどもわが勇力小けりて傲慢無禮るふるおはか

りまれい母は従とて膝下小や孫をせと力たけくして血氣

とふかいはばけり教さうけりぬるがごとく小匹夫の勇といふを
 のふてかゝるはげと大将の志あはれは修きま楚の項王を其力
 大木城招ねも少そと雁子とやもなせしをとて豪氣
 猛勇なるばけりふて仁義の極修ざりけしはひ小人叛たは
 とけく鳥江の軍ふうせやなびぬ張良と女のごとく姿ありま
 ごとと籌と帷幕の内ふやぐして功と千里の外ふあると漢の高
 祖とたとひやあせても東ドク天下と平げるとや一方の大將
 ともさるべしとのちぬのことするはよかふあらず良將の威あり
 て猛るはけりふ勢よりて人をあまらばはとめてをを守り
 て禮うやくし人をいそりて恵とふごとくして軍法武略あり

達とちしてよく教けふを靡ひく志こころとてよくあつたことをよみて大徳たいとくと云いふべし
 とまうふ小勇せうゆうカと凡およに恃たもつ小して仁にんと義ぎと云いふを禮れいと云いふ禍わざはひやよ
 らば家いへおぢびて上うへ世よ々の武ぶ名なまをどといふべしといふふまゝさん
 といふ吳いじん刀やいばとていふ戒かいめけお心こころ次つぎは少すくなくぬまうてぬく心こころ小こ武ぶ
 入いれまじると後ごよりといふとてたゞ一ひと切きりあつたてて漢かん操そうの母はは違ちがひをいふま
 りしよりとあつてもいふまゝとておちるべしとて軍くんと法ほつと烟えん練れん
 一ひとけおはふいふく小こなれおおいせとておまうけ母ははの力ちからすはしむ
 一ひと勢せいおてたて後ごけいひくといふまゝばかりおまゝといふをいふたてた小こ
 ちく意い愛あいぬく人ひと分ぶんり故ゆゑ主しゆ子の血けつ氣きの勇ゆうを考かうへて智ちをわきま
 不ふ義ぎをおり人ひとむる方かた小こうう論ろんたひまおけおらばあふ一ひと城じやう

の重なる人の母もぞありきふいとまをさく慕へし記えぬしうり

富田信高妻

慶長五年のみごとく富田信濃守信高と
御味方と

て伊勢北津の城よりあつたをいれはる部左京亮光嘉も上野

の城の要害ありかりけるゆゑ信高は加つて津の城とま

とけりさかほはふ
討手とて毛利長曾我部の大軍と

とく八月廿三日は押よせり四面より赤かこめて攻められも城

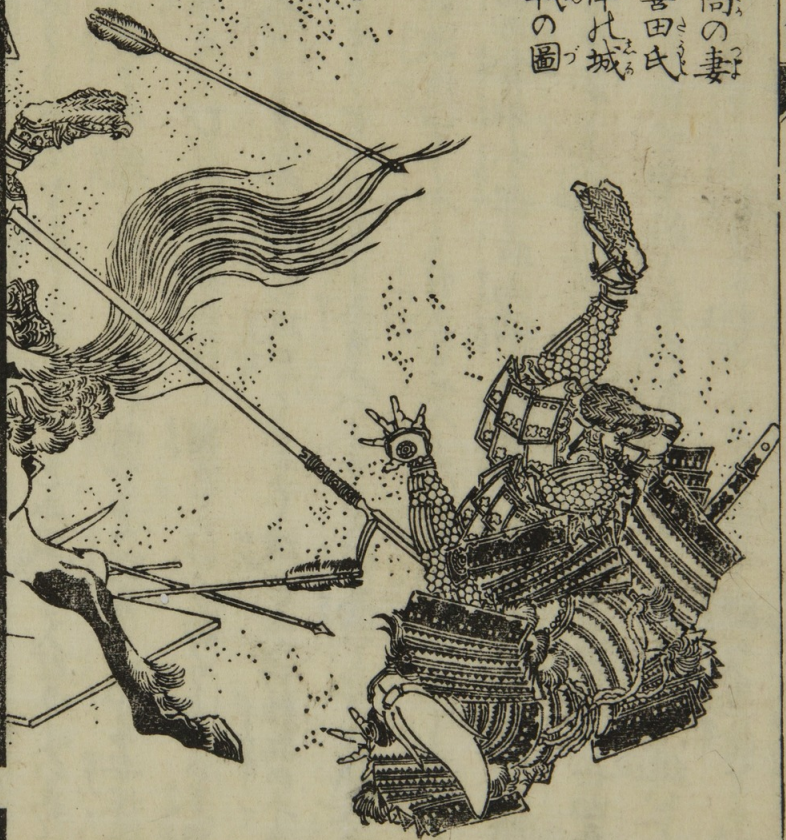
中よりふせを戦ひしはる寄手おほく討て引けふが翌

日ハ殊よまげし攻よせし味方ハ討死おほりをりさく敵

も勝ふのりて競ひはるちよ二三の丸とて攻やぶられ

バ信高とばくく本丸とぞく士卒とととみ戦とまびきしおみか
子敵と七八度まで追とて河まき首とと討えととども安塚平
八佐々孫市をむねと兵おほく討きまけりかりい本田
志摩馳来りともや四方の攻口とと破とつが雑兵の手み
かり給らんよりとく本丸よ入るべいとて信高ととぞひ入ら
んとせしに敵追すま付入よせんとい信高引くへて突え
らへバ光嘉の舎弟分部右馬助と信高と助けて防ぎたくひ
みる死狂よりて火花とちりけりう家所よ年のほど廿四五
たつりるるさも何てやゆる若武者ありとゆふがとと兒緋おど
しの上はひよ半月おとる胃とつとと片鎌の手槍とと

富田信高の妻
宇喜田氏
伊勢の津比城
血戦の圖





女
監
卷
三

さへまがちに敵は打ちくうやとあつるまうせよあまきこ手とおりせ
 槍やりひきさきげく立たつろけるつとほひたやぶつとも目とぞろりし
 て感かんとけり信高のぶたかも誰たれとあつねば光嘉みつあきの小姓こせうやと右馬助うまのすけ
 は問とまけ家いえは左京さけい家いえの見おびえ侍さむらいは假粧けいざうして齒はぎ
 染そるやうみ見ゆとなば女武者をんなむしやまでい々とやさる信高のぶたかも又も
 敵てきのあまうふと拂はらひのけて引ひきさぬは彼内甲かのうちのかぶとと見みとて
 うばせとふるり走りよるやわが君きみのまご討うちと給たまひあふ
 おりやうのやとつと見とぶわが妻つままでぞありける信高のぶたか大お
 おどろきて御身ごみいなる事ことまでうかふ働はたらかぬやとわれ君きみ
 うつとせあひぬとやえしゆえなるど場ばあて枕まくらとやぶ死しを

んとかく丈度して舞りひひ〜ふいそて御目ふうふ喜しそ
 ちとてよほごび泣は涙やまされ〜信高いゝ感とて詞
 もる内は伴るひ入あひちり此人を宇喜多安心の女よせ世
 小名ごうそ美人なり心中しく武藝もよくせ〜も急か
 いちどき振舞ありけりさうほどに此日も城ハ持あゝてま
 ず不攻もど落さうけふ敵ハ四面はみち〜て味方残りす
 くるふ〜これ信高心を剛るれどもとやせん方もたうけ
 あたおいゝ敵方より扱て入〜城とあけ〜これゆふ
 すめけし信高やじ事と得て〜て一身田〜ど引退とよけ
 ぶあどよりす〜ふ 出陣せしとバ二十萬石の領主

久しと敵方より強くしてはけきども今さら此身ふるぬきば
 て禄よやぶきんぬ義と変せん士の思ひとよぬ事なりとて
 ほひは高野山へおとひくしけりさきバ
 [] の御陣をかり
 信高も高野よりめ出されもとの知行七萬石ありし小
 一萬五千石と加賜り二ふび津の城主とありあり内室の
 ばくさもびりりて賞ドさせあひりとまん

○ 神原玄輔の談苑といふものみ富田信濃守が妻の阿濃津小
 て軍いなる事と北越太平記よのせとれど此書ハ紀州の
 宇佐美竹隠が作してきていふ據る事なり信ず
 べくべといふありきども此事阿濃津の口碑は存し

富田氏の家もいふに傳ふれば必ずしも

あづき

大尾

此女鑑ハ伊勢安濃津方る津阪大人の撰ハ其詞
拙備子孫ハ世々ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
力由ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
てらハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
をハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
因ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
加ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
をハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
こハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞
本ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞ハ其詞

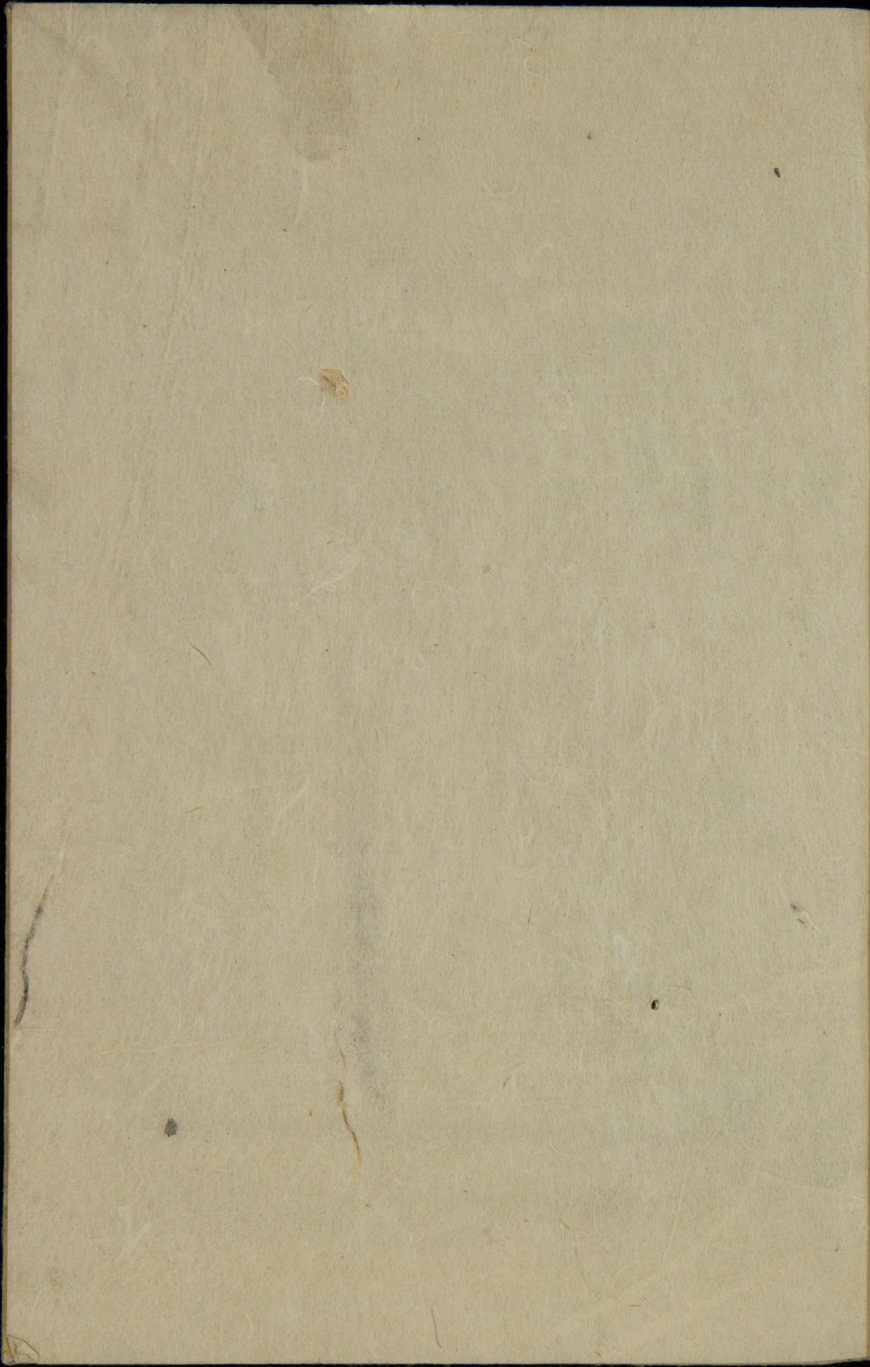
天保十年亥の條 山崎義成

一五 拱曲

女
鑑

卷
三

九
一
一



 三重県立図書館



140046913